



あかるく・やさしく・たくましく！

■卒園・進級おめでとうございます！

コロナ禍となり3度目の春を迎えました。今春、卒園を迎える年長児は、正にコロナ禍の3年間を過ごした幼稚園生活となり、その間、社会（世界）も大きく変化いたしました。

合計特殊出生率も国の想定より10年も早く80万人を割り込み、人口減少時代に歯止めがかからない状況に、岸田首相が年頭の記者会見で掲げた「異次元の少子化対策」に期待がかかるものの、現状では未知数でもあり、依然として先行きは不透明な状態です。

しかしながら、子どもたちはこれからの社会を生きてもいなくてはなりません。この3年間で社会（世界）が大きく変化したように、刻一刻と変化していく社会に適応していなくてはなりません。そう考えた時に、子どもたちが生きていく上で大切なことはなんなのかを思うと、最終的にはやはり「安心できる居場所」があるということではないでしょうか？入園当初の登園風景に子どもがぐずってお母さんから離れない様子をよく見かけますが、それは単なる甘えではなく、それまでの生活で子どもとお母さん（保護者）の愛着形成が確立されているということでもあり、見方によってはお母さん（保護者）の勲章でもあるということがいえます。その愛着形成ができている「自分の居場所」がベースにあるからこそ、社会生活が営めるといことがいえます（それはともすると、大人も同じかもわかりません）。もちろん、それは家庭であることが大前提にはなりますが、子どもたちを預かる幼稚園等も当然そういった要素は大いに求められます。

当園でも、すべての活動は愛着形成をベースとし、子どもと先生の信頼関係の上に様々な活動がのっている2段式であるとお考えいただければと思いますし、ぜひ、国には、そういったベース（充実した家庭環境の構築）を作りやすくなるような子育て支援策を期待したいと考えています。

その上で、子どもたちには「出る杭になることを恐れるな」ということを伝えたいです。いわゆる、昭和型の教育にありがちな、右に倣え、みんなと一緒にいいという考え方です。時にはそういったことも必要ですが、それだけではなく、もうお分かりだと思いますが、自分をいかに表現するかということが、令和型の教育では求められるてきます。ただ、自分を表現するということは簡単なことではありません。時には出過ぎた杭は打たれることが多々ありますが、それを恐れず、出る杭にぜひなってもらいたいと思います。出過ぎた杭はいずれ打たれなくなりますし、ぜひ、保護者の方にも、出ようとしている杭を打つことなく、見守っていただき、必要な時に、必要な支援をしていただくことが、子どもたちの大きな成長に寄与するものと考えます。

卒園児の保護者の皆さまには、コロナ禍の3年間、本当にありがとうございました。保護者の皆さまのご理解とご協力あつての3年間だったと改めて深く感謝申し上げます。進級児の保護者の皆さまには、コロナ禍も新たな局面を迎えますことから、引き続きのご理解とご協力をお願いいたしまして、結びの言葉といたします。この度は、卒園並びに進級、誠におめでとうございます。

園長 野口 大仁